



東京のレトロ建築を歩く

第 10 回

旧古河庭園洋館（大谷美術館）

武蔵野大地の斜面を活かして設計された、旧古河庭園。

北側の小高い丘に洋館、斜面に西洋風の庭園、低い位置に日本庭園が配置されている。

旧古河庭園がいまの形に整えられたのは大正6年（1917年）。古河財閥三代当主、虎之助の本邸として建てられた。洋館と西洋風のバラ園の設計を担当したのは、旧岩崎邸やニコライ堂を手掛けた建築家ジョサイア・コンドル。この洋館は彼の晩年の傑作として広く評価されている。

地上2階、地下1階の洋館の躯体は、煉瓦で造られている。外壁は、赤みを帯びた新小松石（安山岩）で覆われ、重厚な趣を醸し出している。

南側の庭園から見た洋館の外観は、ほぼ左右対称で、両脇に切妻屋根（2方向に勾配を付けた三角屋根）、その間にはバルコニーが設けられている。正面中央の屋根にはドーマー窓（屋根に突き出た小さな屋根付きの窓）が配されている。

1階は、来客をもてなすための食堂や応接室が配置され、外観同様に洋風の空間である。

一方、家族の生活の場とされた2階は、ホールと寝室以外は畳敷とされ、洋館のなかに「和」を巧みに取り込み、調和が図られている。



東側から洋館を望む。こちら側にも美しい花壇が設えられている

DATA

名 称 旧古河庭園洋館（大谷美術館）
所在地 東京都北区西ヶ原1丁目27番39号
完 成 大正6年 設計者 ジョサイア・コンドル



洋館南側に面したバラ園には、春と秋に様々な種類の美しいバラが咲き乱れる



建物南側に広がる洋風庭園は、「バラ園」として知られている。
左右対称の幾何学模様に取り込まれたフランス風の庭園と、石段やアーチなど立体的なイタリア風の庭園の特徴を併せ持つ。
春と秋には、およそ100種、200株の色とりどりのバラが咲き乱れ、バラと洋館とが調和した絵画のような景観美を見せる。
さらに低い場所には、7代目小川治兵衛（通称・植治）の手による回遊式日本庭園が配置され、建物と同じように、洋と和が見事に調和している。
庭園全体が、平成18年（2006年）に国の名勝に指定された。

